おちほ

第31号　平成10年6月30日　発行　社会福祉法人　椎の木会　落穂寮　発行者　山下　陽一

笑顔満開！

行ってきました毎年恒例「お花見遠足！」予定していた日は雨の可能性が……ということで、急でしたが前日の四月十一日に変更となりました。準備の方は少しバタバタと大変でしたが、当日は汗ばむ程の良いお天気。しかも桜満開。とはいっても、寮生さんのメインは「お花見」ではなく「お弁当」。食べ終ったあとはお腹いっぱい、笑顔もいっぱい。職員もそんな笑顔に囲まれて一緒に走りまわったり、のんびりしたりとそれぞれに楽しい一日となりました。

桜だけでなくたくさんの花が咲き乱れていた春。でもいつのまにか夏はもう目の前です。夏の太陽の下では笑顔も元気も全開。といきたいところですが、これがまた難しいものです。

でも無理に笑ったり、元気なふりをしなくても大丈夫。寮生さんと共に生活をしていると、笑って泣いて怒ってと、いつもうまくいくことばかりではないけれど、元気印の夏にだって雨やくもりの日があるのです。たまには落ちこんだり泣いたりしてもいいのです。

寮生さんに励まされ救われ、そして、暑い夏に負けない熱い思いを抱いていれば、きっとお互い自然な笑顔がでるはずです。

ふくし今昔

愚公山を移す

理事長　増田正司

お隣の国、中国（中華人民共和国）の故事に、愚か者と村人に嘲笑、罵倒されながら、山を切り崩し、土を盛ったモッコの前後を平秤棒でかついで、とうとう一山を別のところへ移してしまったという話しを読んだことがある。ひたすらな愚直さに唸ってしまった。

不器用と鈍重をあわせもった僕は、落穂寮の運営をまかされて、いつも心掛けたことは、愚公の愚直さを学ぶことだった。寮生と職員をまきこんだ大事な生活をみんなで作り、みんなが汗を流してひたすら働くことだった。

大津の南郷から今の石部に移ったころ、山をブルドーザーで切り開いて、荒削りのままの敷地に建った寮舎の周辺は荒れたまま、A棟南側は山がせまって陰気に薄ぐらく、もっと陽光（ひ）のあたるところにと「愚公行」が始まり、すこしずつ部屋に明るさが増していった。寮生は一輪車や石箕に盛った土を運び、男子職員が山を削り女子職員が土を盛る、屈強の男子職員が護岸ブロックを積む。裏ごめの土は寮生が運んだ。ブロックが積まれるほどに、A棟南面がひらけてきた。そこにプールを作ろうという案が浮上してきた。更にブルドーザーをいれ前面の山を境界線ぎりぎりまで削りおこし、押し出した土砂が新しい職員宿舎建設の敷地造成に使われ、また学習棟建設用地の確保もできた。

昭和45年に移って以来、敷地内のいたるところに寮生と職員との汗の結晶ともいえる労作がある。けっして力もちの寮生ではなかったが、うまず（倦まず）たゆまず（弛まず）平然と日々為しとげてくれた寮生は、われわれが及びもつかない力の持ち主であると驚嘆するばかりだ。

大奮闘した寮生や職員に恵まれ、今日の落穂寮があることを忘れることができない。ふりかえってみると深い感慨とともに感謝の思いが満ちてくる。力も知恵もなくてもひたすらに愚直に行うところに、道が開かれることをこれからも思いたい。（98・5・25誌す）

ふくし今昔

パッといきましょうパッと

落穂寮長　山下陽一

わたしたちがずっと願い続けていた落穂寮の改築計画がやっと実現することになりそうです。

五月二九日午後、県障害福祉課の担当者より、三月初めに厚生省に提出した更生施設の建設の協議書についてゴーサインである「内示」があった旨の連絡が入りました。さまざまな人達の支援をいただきやっとこぎつけた、という感じがして感慨無量でした。国の政治がこれほど私達の生活と密着していると感じたことはありません。去年は、政府において国家財政の破綻をもたらす財政赤字の改革のために歳出が大幅に削減されました。当時、落穂寮の改築は県の計画においてはほぼ固められていたものなのですが、「内示」にもれてしまいました。つかのまのぬかよろこびで、まさに晴天の霹靂とはこのこと、私たちは唖然としていました。そのうえ、この財政再建が国の方針であるとき、一年後に必ず実施できる保障はなにもないということで、私達は途方にくれる思いの日々でした。

ふくらみすぎた公共事業を見直して歳出を一律に抑制した予算編成をするということですが、道路や鉄道を作ることも大切なことながら、おとしよりや障害のある人達の福祉への支出まで抑えるとしたなら、すでに進みつつある高齢社会の対策に矛盾するのではないかということを強く思います。

先日、京都行きの電車の吊広告でおもしろいものを見つけました。それは街の家並みが広がり、屋根の下からいろいろな願いが掛け声としてあがっており、「おこずかい上げろ」「旅行したい」などあがっているなかで、「パッといきましょう、パッと！」というのがあり、吊広告の右下にスポンサーの名前が小さく記されています。なんとこれが「大蔵省」とあるのです。

「大蔵省」は、所得税の特別減税を行なうので、国民の皆さんはその減税分は預金などしないで、消費することが日本の経済を好転させることになるのですよ、という意味らしいのです。この「パッといきましょう、パッと！」には思わず笑いました。

私達としては施設を建て替えるなら、建築のための資材や人員も多く必要なため、経済循環もよくなり社会資源として有効に利用されることにより、それに伴う経済効果は大きく期待され、やさしい街作りに果たす役割などの多方面への波及効果は計りしれないと思われるのです。

自己資金を確保するため、政府の関わる機関が資金の貸付を行なうのですが、この制度が大きく変わり融資を受ける金額が縮小されました。わたしは今後はますます社会情勢は厳しさを増してくるだろう思います。そのような中で建設をすすめなくてはなりません。しかし、これから施設の運営など困難なことも多く起きてくるでしょうが、私達はやりがいのある仕事と確信して進めます。心よりご支援をお願いいたします。

わたしの明日を語る

DREAMS COME TRUE.

「私もこれから」

若竹共同作業所職員　佐藤　妙子

落穂寮を退職して五年が経ちました。ほんの昨日のことのようなずいぶん前のことのような、とても曖昧な気持ちです。昨日のことのように思えるのは、落穂寮の家族舎に住んでいるので、寮生さんとふれあう機会が多いからでしょう。そして、ずいぶん前のことのように思えるのは、今は作業所の指導員として勤めているからだと思います。

落穂寮で勤めていた時も、現在たちの周りの人たちとの関係、つまり地域の人たちとの関係です。誰もが思うこと、それは、やはり良く思われたい、理解してもらいたいということでしょう。しかし―してもらいたいと望むばかりでは互いに歩み寄ることなど不可能であることは、わかっているつもりです。地域の人たちに理解してもらいたいと願うならば、何らかの行動を起こしていくことが大切で、しかも続けていかなければならないと思います。それでは、いったい何から始めたらいいのでしょうか。やはり知ってもらうことなのでしょう。私の勤めている作業所でも、地域の行事などに参加するなどしています。しかし、ほんとうに作業所の近くの人たちとの交流よりも、少し離れた地域の人たちとの交流がほとんどのように思います。作業所近くの地域の人たちとの関係は、まだまだこれから造り上げていかなければなりません。

一番身近なことで一番大切なこと、それは出会った時のあいさつだと思います。明るく元気の良いあいさつは、する方もされる方も気持ちの良いものです。作業所では、見学などお客様に対してはもちろんですが、出会った人にもあいさつするよう心がけています。職員だけでなく、利用者の人たちもずいぶん習慣づいてきていると思います。このあいさつは、これからも続けていくと共に、自然なやさしさの中にある関係になっていけるよう、更に努力していく必要があります。

私も福祉の現場に立っていると今では、なつかしくさえおもえるこのごろです。

また由紀子の姉が二年前に結婚し私たちに孫が授かり、今はおもついた生活をおくっています。

私たち夫婦は地域の障害者の親たちと子供たちが、安心して住めるようにと12年目のこの四月一日作業所「いしづみの家」を開所する運びとなりました。

12年間平坦な道のりではなく「なぜ日吉台に建てるのか」「住宅が値下りする」「人も傷つけるのではないか」といろいろささやかれました。この時ほど人の心の狭さを痛感したことはありません。

でも少しづつ、少しづつ理解者がふえ「がんばって」「めげずにやりとげて下さい」などのはげましがあり、これも12年間の重みでしょうか、建設してみればとてもなつかしいおもいでになりました。今では老人会、近所の人たちがお手伝い下さっています。仲間の人（知的障害2人、身体障害5人）と職員4人（所長・指導員3人）です。一人は落穂寮におられた川端（今井）先生がお手伝い下さっています。職員にもめぐまれました

はいえ、ほんとうの所どれだけ理解できているのか疑問です。今後の地域への働きかけの中で、私自身も今一度作業所を見つめ直し、ほんとうの意味での理解を共に深めていきたいと考えています。

▲45周年式典で、ウェイトレス役の佐藤さん（真中）

由紀子は福子や

保護者　紺谷　のぶ子

早いもので落穂寮にお世話になって七年がたちました。

最初見学にきた時は玄関の前で裸になり先生を「すごい子が入ってくる」とびっくりさせたり、入寮後はテレビを倒したり、ガラスを割ったりといろいろにぎやかにやってくれた由紀子でした。でも

▲親子でお出かけを楽しんでいます

「いしづみの家」です。入所者から、いしづみの家はたのしいところと声があり、つくってよかったとホッとしています。

開所一日目からミニ額の作業をはじめられる作業所もめずらしいのではと喜んでいます。

宣伝になりますが、かわいいドライフラワーをあしらった額はプレゼントに最適です。御利用下さる方はご一報いただければ幸いです。

ゆき子の23年間を振り返ってみれば、苦しかったこと、たのしかったこと、いろいろありますが、ゆき子が生れたからこそ私たちは強くなれたとおもっています。

今は亡き由紀子の祖父はいつも「由紀子は福子や」といってくれていました。私たちもそうおもいます。

これからも、由紀子のためばかりでなく、いろいろな人たちのめぐり合いを大切にして前向きに日々送りたいと願っています。

福祉施設にのぞむこと

三雲養護教諭　藤　方　公

私が、福祉施設にかかわりをもつようになったのは、今から12年前、三雲養護学校に転勤してきた時からである。毎朝、近江学園と落穂寮からこども達が登校してくる姿を見、学習が終わると送って行くといった日課をすごしていたが、その当時は施設の生活をよく知らないままだった。

そもそも、私が、施設の障害をもった子ども達と接した（知った）のは、石山小学校（大津市）の低学年の時である。その当時、近江学園は南郷にあり石山小の運動会の時に園生の方が交流で参加されていたし、私の友達のお父さんが学園の職員の方で何回か学園に遊びにいった事を覚えている。まさか20年後に、再び近江学園や落穂寮と仕事を一緒にするとは、予想もつかなかった事である。よく障害者施設は、暗いとか閉鎖的だといったイメージを一般的に聞くし、障害児教育に携わる者の中にも少なからず同じようなイメージをもっている者もいる。転勤してきた当時の私自身は、幼い時に数回近江学園に行ったことがあるものの、もう少し、イメージがもてない状況であった。実際に施設の事を体験したのは、今から7年前、落穂寮臨海学舎にボランティアとして参加させてもらった時である。

その後、運動会や学習発表会、阿星登山などの行事にボランティアとして参加させてもらっている。それと同じ時期に、石部町でボランティアサークル“ハロウィン”を結成し、落穂寮以外の様々な団体（手をつなぐ親の会、自閉症児などに参加したり、石部町社会福祉協議会主催のボランティア講座を企画する等の活動を行って来た。これらの活動の中で、福祉施設のありのままを社会に伝えていくためには、施設を見る機会を増やす事、寮生さん達との交流を体験する事が大切だと確信をもった。そこで、三雲養護学校学校開放講座の中で落穂寮見学と寮生さんとの交流会をさせてもらった。参加者のほとんどが福祉施設に来るのがはじめての人ばかりだったが、前述したような一般的な施設に対するイメージは、少しずつではあるが払拭されたと思う。このように、落穂寮のような施設がボランティア講座などの地域からの様々な要請に答え、現在以上に、地域に根差し、開かれた福祉施設となっていく事が要望されている。

▲平成4年臨海学舎で寮生と楽しむ藤方さん

DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE.

輝け！四十の瞳

春は少なからず変化のある季節。A棟の寮生さんもそれぞれに状況が変わってきます。ここ4年の間にも次々と高等部を卒業し、今年は年長9名学籍5名と、もはや学籍棟とは言い難いような状況となってきました。又、入寮や退寮もあり寮内での移動もあって、数年前と比べても寮生さんの雰囲気は随分と変わり、職員の顔ぶれも変わってきました。そんな中で、ここ4年の間変わらないものがありました。

棟目標『のびのび活き活き元気は…言葉の通りですが、確かにそこにはA棟の寮生さんと職員が一緒に生活していこうとする姿勢があります。しかし、裏を返せば、ずっとこの目標が達成できずにきたということ？でも、とても基本的な忘れてはいけない部分だと思うのです。そして、今年はその目標がさらにグレードアップ。小目標が決定。

『一日一回輝く目』一日のうち最低一回は、キラキラと輝く瞳ですごす時間を持ち、一人ひとりが充実した毎日を送ることをめざします。そしてもう一つ。

『できるかな　もすこし頑張ればできるかも』――この五・七・五の標語のような小目標には、それぞれが課題に対して積極的に向い、諦めることなく一緒に頑張っていこうという思いが込められています。

あっという間にすぎていく毎日の中で、それでもこの目標を忘れず、さらに来年はプラスαができるよう、今みんなで頑張っています。

朝一番で出勤すると、いろんな顔が迎えてくれます。「おはよう」の元気な声、かけよって来る人、頭を触りに来る人…いろんな「挨拶」に笑顔で応え、今日もA棟の一日が始まります。

ぐるぐるまわる?!

昨年のゴールデンウィーク外出は阿星山登山の天気の予定でした。しかし、当日は天気が回復したものの、前日の雨で道はぬかるみ、木や葉が濡れているという事で、急遽帰帆島にピクニックに行く事になりました。皮肉にも、寮生にも職員にもうけが良く、楽しくすごせたのか、来年もここにしようという事になりました。

さて、今年のゴールデンウィーク外出は、勿論帰帆島。年度当初に日程も決め、昨年の記憶を元に皆で楽しみ方を計画していたにも関係なく、今年も毎年から悪天候の予報。ふたをあけてみれば、何と昨年同様前日は雨模様で、当日の出発直前までパラパラと相憎の天気。仕方なく見切り発車で寮を出発し、その途中で行き先を決定するという始末。結局行き先はビワコタワーに。雨模様で人が少ないと見込んで行ったものの、期待は裏切られ、多くの人が来られていました。自分達の事をよそに「なんでこんな天気の日に来るのかなー。明日の方がもっと天気良いのに」と勝手な事ばかり言って中へ入っていったのでした。お弁当を食べ、ジュースを飲み、さあ乗り物へ…。さて、ここで問題です。皆が自ら選んだ乗り物は一体何でしょうか？答えは見てのとおりです。髭面の、体の大きな皆が小さな子供達に混って並び、しがみつくように乗っていました。他の乗り物（二百円入れれば動く自動車など）にも挑戦しましたが、動く前にとんで逃げて行ってしまいました。それでも、日頃のあまり来ない所で、いつもと違う雰囲気を皆で楽しみました。お弁当を食べ終える頃には青空が広がり始め、帰りはドライブを楽しみ、ファミリーレストランでおやつを食べて帰寮しました。

二年連続、雨に降られる事なく予定変更となった外出ですが、はてさて、来年はどう計画するべきか、空を見上げてはぐるぐると頭の中でまわっています。

▲メリーゴランドで楽しむ寮生さん

▲いつも笑顔の五十嵐さん

五十嵐仁美

落穂での新しい生活が始まり早二ケ月、私にとってのこの二ケ月は一年にも二年にも感じる程多くのことを経験した様な気もする反面、ほんの二、三日しか経っていない様な気もする程毎日が新鮮です。

沢山のことを発見し学ぶことに不安もありますが、それ以上に楽しさや喜びを感じていけるように、笑顔を忘れず前向きに頑張ろうと思っています。

おっちょこちょいな私は、既に計知れない程の失敗をしては迷惑をかけてばかりいますが、周囲の暖かい支えに励まされる毎日です。

アットホームで生活感あふれる落穂の「家族の一員」として日々前進あるのみ、こんな私ですが末長くよろしくお願いします。

▼この笑顔に支えられて…。

C棟での生活を通して

今年度も新しい一年が始まりました。にぎやかな女子棟の寮生さんとの生活、泣いたり、笑ったり、おこったり、喜んだり、拗ねてみたり―それぞれの寮生さんの思いが目粉しく行き来します。集団生活であるがゆえに起きてくる軋れきもあります。そんな寮生さんにふりまわされながらもそのエネルギーあふれる“生”に圧倒される毎日です。一人一人の寮生さんが一日一回でも笑顔を見せてくれるような生活、おだやかな充ちたりた表情を見せてくれることを願い、今年度もスタートしました。私がまだ新人の頃、先輩の職員が「寮生さんの笑顔に支えられてきた…」と言われていました。なにげなく聞いていた言葉でしたが、その意味が実感として伝わってくる日々です。

“若い”おばさんの想うこと

ゆげのむこうがわ

事務所の窓口に、ちょこちょこと寮生さんがのぞきに来てくれる。からかってみたり苛めてみたりしながらコミュニケーションをとっているつもりなのだが、彼らはほんの一部の寮生さんにすぎない。生活全般を共にしている現場職員や、皆の楽しみにしている食事を作っている給食職員とは違い、施設というものの持つ意味あいからは少しはずれた、閉鎖的な雰囲気が事務所にはあるのかもしれない。

しかし、大きな視点から見てみれば私達職員の目標はやはり一つしかないように思う。入所者の命を守りきる、という一点である。生命体を守るという意味だけではなく、もっと広い意味で「生命」を守る「しごと」だからこそ寝食を共にする現場職員の存在意味は大きすぎる程大きいのであって、その現場職員の働きやすい環境を整え、間接的に寮生さんの生活、命を守る仕事に従事するその他の職員の仕事も重要なものとなっている。

私などは感情にまかせて我が子に手を上げることもしばしばであるが、でも子供の存在感、愛しさを人に解ってもらいたいという、親のエゴも承知の上での願いが無意識にある。ましてや障害のある我が子を他人の集団の中に手放さざるを得ない状況を想像したとき、複雑な心境の中にもそうせざるを得ない自分を思い、その命を預るという使命のある施設に、どれ程の想いで子供をあずけなければならないのか、と察するに余りある気持ちになる。

ともすると、職員間、保護者共こちら側からあちら側をかいま見ようと目をこらしても、渦気ところか霧かもやの向こう側によりやくかすんで見えるような、そんなさみしさを感じることもあるように思うが、もう少し風通しの良い落穂寮になるように、事務所の若いおばさんは考えている。

小さな交流 ～老人クラブさんありがとう～

落穂寮に10年も前からボランティアで来てくれている人達がいます。石部町老人クラブ有志の会の皆さんです。農作業の奉仕から始まり、今は月一回のペースで膳い物をしに来て下さっています。

どこでどう破れてしまうのか寮生さんの衣類はすぐに傷んでしまいます。その膳っても膳いきれない衣類を手伝って頂き、いつもとても助かっています。そして、それは寮生さんにとっても喜びとなっているようです。膳ってもらった衣類を着る度、「おばあさんがぬった」とうれしそうに何度も口にする寮生さんもいます。そういう様子を見ていると、直接会う機会は少ないとしても、物を通してでも交流はできるものなのだと感じ、大変うれしく思います。来て下さっている方達は、「これくらいしかできないから…」と謙遜されましたが、充分小さな交流になっているのではないでしょうか。皆さんで膳いものをしながらおしゃべりするのも楽しみのひとつだということ。和やかな雰囲気の中、でも手は休むことなく動き続け、あっという間に山積みの衣類を仕上げていく手際のよさには感心するばかりです。肩ひじはらずにボランティアをしていく、そういう姿勢も見習いたいところです。ボランティアの形にもいろいろあります。自分のできる形でしていったらいいんだな、と思わされました。

これからも豊富な経験と知恵で助けて頂きながら、この小さな交流を大切にしていきたいと思っています。そしていつか大きな輪につながれば…。いつも来て下さっている老人クラブの皆さんに、寮生さんの気持ちを代弁して、

「いつもありがとう。またきてね。」

ご支援へのおねがい

落穂寮は、今年五月に創立四八周年を迎えました。落穂寮で生活してきた寮生や諸先輩が築いてきた実践を積み重ね今日まで共に歩んでまいりました。大津市から現在地石部町に移転して二八年が経過しましたが、その間社会の情勢も落穂寮の様子も変化しています。

落穂寮は創立以来知的障害の程度の重いこども達の生活の場として福祉の充実に努力してきました。現在寮生の平均年齢は二四歳となり、重度障害児の高齢化現象という未経験な場面に直面しております。

さて、現在の建物は児童施設の基準でブロック構造により建築されたものですが、築後二八年を経て老朽化が著しく進みました。入所児童の平均年齢の上昇と施設の老朽化を踏まえ、成人更生施設への転換を訴え続けてまいりましたが、今回、国県の補助金を受け、やっと実現の運びとなりました。これもみなさまのご支援のおかげと深く感謝申し上げます。

しかし、建設に伴う自己資金の問題は民間施設では共通の悩みとなっており、貸付制度のおおはばな変更のため、自己資金の捻出に苦渋しているのが現実です。

いま、財政より歳出の配分の在り方が問われています。障害のある人達の福祉の充実をめざし、今後もさまざまな人達や各方面の機関へお願いを続ける予定ですが、広く皆さんにご理解いただき、ご支援ご協力くださいますよう切にお願い申し上げます。

木言（こと）

ある夜、君は僕に問いかけた。でも僕は答えなかった。逃げていたのだ。でも君は、深くは問わず自分の思いを告げて、淋しそうに去ってしまった。ストレートに自分を向けてくる君に、何も返せなかった僕。このまま時が過ぎれば何事もなかったかの様になるのかもしれない。でも、僕の脳裏に焼きついてしまったあの時の姿が離れない。僕の中に〝気〟を溜めて「今度」逃げずに向かい合おう。君の笑顔が見たいから…。